



東四條就労あっせん現場における早朝の就労風景 (昭和41. 3 撮影)



西成労働分室に早朝から仕事を求めて集る蒼氓の群 (昭36. 9 撮影)

ルばかりの間と、日本橋から電車通りの西側を南へ一丁目から五丁目へと続く細長町並みであった。

芝居の道頓堀と、墓場の千日前の裏側に、帯のような裏町のなす筋で、八百屋、のし屋、米屋のほか、宿屋もあって、その間を長屋の借家が埋め、芸人、占師、法界坊、通路、車曳き、乞食などの下層労働者が住んでいた。

この地域の起源はかなり古く、享保十七年から十八年にかけて、難波御蔵へ幕府が租税として取りたてた米を入れて置く倉庫で、今の大阪スタジアム附近にあった。に米を運ぶために堀らせた難波新川が、附近の細民の便役によるものであったか

長町スラムの誕生

之で、地名のことは置くとし、この地区に問題の集落ができて、先の名改稱の時に明治三十三年度の頃のことと云われる。それまで、大阪のスラムは、今の南区日本橋筋に沿った長町(名護町)にあった。

明治二十三年の八月から九月にかけて、『新聞日本』に、貧民の視察記が載ったが、貧民地とは、東京山谷秋葉原の、飢寒窟とは大阪の、名護町(長町)のことである。

これに依ると当時の大阪のスラムは、今の日本橋南詰から道頓堀川に沿って、東へ百メートル

ら、この堀川を、人々は極貧場と呼んだと云う。まさに日本人の汚臭、恥処と云うべき態度であつて、初期の大阪の地下鉄が、かつての朝鮮人諸兄の勞働力によつて、その基礎工事が竣されたにもかかわらず、朝鮮の人達を何の理由もなく、ベツ視していたのと酷似していた状況と、云うべきである。

昔の大阪が、天下の台所として繁栄を誇つてゐるとき、その片隅には、すでにこうした貧民街が形成されていたのである。

この地域に建った住宅は、街道に沿う、一軒四戸(一戸一坪)の堀立小屋式のもので、小屋の家賃は日払いで二銭五厘、入口になるところに竹筒がぶら下つていて、これに錢を入れると、家主が銅釜とせんべい蒲団を貸し与へた。住民の大部分はその日暮しで、日雇人夫、下駄直し、露天商人、紙屑賣、大道芸人などであつた。

タンポの中に、そして古い街道沿いに建て、斗つて手に入れなければならぬ。

此処らで、矛盾する現象面も承知の上で、わが伝統ある釜ヶ崎の反省的分析も、進めて行かなくてはならないと思ふ。

この釜ヶ崎は、外社会に対する抵抗は極めて強い筈である。併し、スラムに支配的権威を持つてゐる組織に対しては、意外、従属的であり、本質的には権威従属形である。残念なことであり、恥處であることは言うまでもない。

之は、知らず知らず、ガンジガラメにされていながら、嫌ならどこへでも行くという住居形態や、身軽さ、トラさんの疲り鳥的性格、定着性を弱性格と見なすよつなスタイル志向、等々に本因がある場合が多い。

定着性のないのは浮浪性を意味し、執着性を欠くことになる。したがつて、そこには組織もなければ、集団も無くなつてしまふ。全体としての力を表

られた数軒の木賃宿は、みるみるその数を増していった。無法に、正直者から吸い上げたのである。

新世界は、娯楽街となり、飛田遊廓が開かれて娯楽街もそなわつてくると、その近辺に府辺密集街が発生し、拡大する条件は、ほぼ満たされて来たわけである。

鬼退治は執念がくさるんじ

釜ヶ崎暴動のさ中、いちばんビクビクしていたのは、ドヤの所有者ではなかつたろうか。この世の中で、ほんとうの。がめつ奴は、どん底の人々から吸いあげ、しぼり取るスラム企業の主たちなのである。

スラム企業は、釜ヶ崎をほし、ままにし、府や市は、千成ホテルの火事に見られる様に、殆んど放任に近い状態にして来た。

併し吾々、釜ヶ崎の主役が、このガンジガラメの足かせにしめつけられてゐる間は、到底ダメである。現世に与えられるものはない。

象するものがない、と云うことになる。

だからと言つて、一部の圧力に対して、全然無抵抗だといふのではない、個人の生活を守ることに重きを置きすぎて、人間関係が、簡単な、いわゆる身軽な状態にあるので、もし外部からの圧迫が強いときには、一時的には強く抵抗するけれども、決して、長づきしな川のではないかと思われる。

われら建設者・居住者みんな

こう云つた内面的矛盾に関しては、企業権力は、常に先手、先手に見透してゐることを、知つて置かねばならない境遇の主役である吾々は、着実に、ドヤを中心とする、人間関係を変えていかねばならない。

およそ、旅館業者や商人がグループとして優位に立つてゐるのは、先ず、わが釜ヶ崎の汚臭である。ドヤ街の道路だけで威張つていても、実に仕方がない。

労働者、建設者は、われわれである。

万博を見よ。有名高層ビルを想之。新幹線を走らせた。高速道路はどうだ。

何一ツ、吾々の手で成っていないものは無い。ムンムンする真の人間、労働者の誇りを持って、連帯密集、団結交渉を以て進めばつまらない五階や、六階のドヤぐらひ、何だと言ふんだ。われわれのものなのだ。

住の権利取得など、団結さ之あれば、いとも、簡単なことなのだ。偽善めいた仮設場処などのような煩わしさも、皆無なのだ。名誉あるわれわれは、形式的な泊り客ではない。居住者なのである。

△追記▽

元来、警察官志望の青年は、高校時代なども非常に真面目で、健康、明朗である事は、断言できそうである。残念であるが……。

併し、あの短期間の警察学校を通過して、

任務に就き、ホンの暫くたつと、あの態度はどうであろう。

市井人である年長者に対するあの言葉遣い、交通違反者などに対する態度、服装などによるケイベツの冷たい眼と差別……等々。

あの明朗さは、何処に去ったのだろうか。同じ人間を、人間として扱わない事に、優越感さ之、覚之始めている若い彼等。

恐ろしい事だ。五十年前に戻りつつあるようだ。恐ろしい前途。悲しい教育。静かに、着実に、民主主義を乗り越えて、権力主義に歩み進んでいる現実。実に恐ろしい事である。

雑草という草はなし

冬地熱

△以下次号▽

